

# マレーシア華人の統合と同化

## マハティール前首相の回顧録から考える

Integration, Assimilation or Going Peranakan: Malaysian Chinese in the Memoir of Mahathir Mohamad

山本 博之 (YAMAMOTO Hiroyuki)

2021年12月、マレーシアで出版されたマハティール・モハマト元首相の回顧録が物議を醸した。『希望を勝ち取る——新しいマレーシアのための闘争は続く』[Mahathir 2021]と題された同書(以下、2021年回顧録)は、マレーシア華人は現地社会に同化(assimilate)したがるらないとして、マレーシアに存在する制度的な民族差別の原因は華人にもあり、とりわけ華語で教育を行っていることがマレーシアという国民意識にとって主要な障壁であると明言したためである。

マレーシアは、マレー人(国民の54.6%)、華人(同24.6%)、インド人(同7.3%)および先住諸族(同12.8%)から成る多民族社会である<sup>1)</sup>。マレー人と先住諸族をあわせて「ブミプトラ」(土地の子)と呼ばれて原住民としての特別な地位が認められており、マレー人が行っている宗教(イスラム教)が国教、言語(マレー語)が国語となっている。ただし、マレーシアでは政治・経済から社会・文化に至るまで日常生活のほとんどすべての分野が民族ごとに分かれており、マレー人以外の人々が民族ごとの文化を実践する権利が認められている。例えば教育分野では、公立小学校は国語(マレー語)、華語、タミル語で授業を行う3種類の学校があり、華人は華語で、インド人はタミル語で初等教育を受けることができる。

このように、マレーシアでは少数派である非マレー人が各民族の文化的特徴を維持発展させており、多数派であるマレー人への同化はほとんど話題に上らない<sup>2)</sup>。そのため、マレーシアにおける多数派住民

への同化についてマレーシアの人々がどのように考えているかを知る機会ほとんどないと言ってよい。

2021年回顧録はマハティールの個人的な見解を記したもので、マレーシアの全ての人がある内容に同意しているわけではないが、22年にわたりマレーシアの首相を務めた人物の見解であり、マレーシアにおける同化についての1つの考え方を知る参考になる。そのため、以下では2021年回顧録の内容をやや詳しく紹介しながら、マレーシアにおける同化(とりわけ華人のマレー人またはマレーシア人への同化)について考えてみたい。

2021年回顧録は、2012年にマハティールによって出版された回顧録(2012年回顧録、後述)と一部重なる形で、2003年10月のマハティール首相辞任から2021年の新型コロナウイルス感染症の流行中までの時期を扱っている。回顧録の前半はマレーシアの政治動静およびマハティールの動きや考えを記し、後半ではマレーシア社会が抱える課題とその解決策を提案している。2021年回顧録の内容を紹介する前に、マハティールの政治家としての経歴を概観して、2冊の回顧録の位置づけを確認しておこう。

なお、2018年の総選挙・政権交代の前後から新党がいくつも結成され、連立の組み換えによる与野党の入れ替えが頻繁に起こっているため、以下のマレーシア政治の概観はやや込み入った記述になるが、その内容を大掴みにするならば次のようになる。マレーシアではマレー人政党を中核とする民族別政党の連合体が政権を担っており、マハティールはマレー人政党の総裁として1981年から22年間にわたって首相を務めた。マハティールはマレー人の政治指

になってきたが、本稿では先住諸族のマレー人への同化は扱わない。

1) 括弧内の数値は2010年の国民総数2601万3356人に占める各グループの人口の割合。2010年国勢調査報告書[Jabatan Perangkaan Malaysia 2011]による。

2) 先住諸族に対してはマレー人への同化の圧力がしばしば問題

導者とマレーシア国民の政治指導者という2つの顔を使い分けることで華人やインド人を含むマレーシアの統合と発展に取り組んできた。2003年に首相を辞任すると、マレー人政党を離党して別のマレー人政党を結成し、首相在職中の宿敵だった野党連合と組んで2018年の総選挙で首相に返り咲いた。しかし権力闘争の結果として22か月足らずで首相を辞任し、与党連合とも野党連合とも距離を置いて次の一手を考えている状況で出版されたのが2021年回顧録である。

## マハティール・モハマドの人生と政治活動

マハティールは1925年7月にマレーシア（当時は英領マラヤ<sup>3)</sup>）で生まれた。地元で開業医になるとともに、1946年5月に結成されたマレー人の民族政党である統一マレー人国民組織 (United Malays National Organisation, UMNO) に加入して政治にも関わった。

マラヤでは、独立準備期にマレー人政党 (UMNO)、華人政党、インド人政党の3つの民族政党が結成され、それらが連立することでマラヤ連盟党 (Malayan Alliance Party) が形成された。1957年8月にマラヤ連邦が独立するとマラヤ連盟党が政権を掌握し、UMNOのアブドゥル・ラーマン総裁が初代首相に就任した。

マハティールは1964年4月の総選挙で国会議員に初当選した。1969年5月、総選挙でマラヤ連盟党が国会と州議会で議席を大幅に後退させたことを一因としてマレー人と華人の衝突事件が起こり、100人以上の死者を出す事態に発展した（5月13日事件）。国王が非常事態を宣言し、国会は停止された。マハティールはアブドゥル・ラーマン首相の退陣を要求するとともに、『マレー・ジレンマ』[Mahathir 1970] を刊行して、近親婚は遺伝的要因による疾患の発病を高めるという医学的な知識をもとに、マレー人は近親婚が多いために華人やインド人より民族として劣っているとして、マレー人への優遇政策の必要性を訴えた。同書はマレーシアで発禁処分を受け、マハ

3) イギリスの植民地だったマラヤは1957年にマラヤ連邦として独立した。1963年にマラヤ連邦、シンガポール、サラワク、北ボルネオ（サバ）がマレーシアを結成した（シンガポールは1965年にマレーシアから分離独立した）。

ティールはUMNOから除名された。

非常事態のもと、マラヤ連盟党は地方政党を取り込んで国民戦線 (Barisan Nasional) に改組され、ラーマンにかわってアブドゥル・ラザクが第2代首相に就任した。マハティールは1973年にUMNOに再加入が認められ、教育相と副首相を経て1981年7月に第4代首相に就任した。それ以来、2003年10月に辞任するまで22年間にわたって首相を務めた。

後任のアブドゥッラー・バダウィ第5代首相はマハティールが進めてきた国家プロジェクトの多くを中止したためにマハティールと対立した。マハティールは2008年3月の総選挙で国民戦線が勢力を大幅に後退させるとアブドゥッラーの退陣を要求し、同年5月にUMNOを離党した。2012年に刊行されたマハティールの回顧録である『国会のお医者さま——マハティール・モハマド医師回顧録』[Mahathir 2012] (2012年回顧録) は、マハティールの両親の生い立ちから説き起こし、2008年5月にUMNOを離党するまでが記されている。

アブドゥッラーの首相辞任によりナジブ・ラザクが2009年4月に第6代首相に就任し、マハティールはUMNOに再加入した。しかしマハティールはナジブの独裁的な姿勢や汚職疑惑を批判して2016年2月にUMNOを離党し、同年8月に元UMNO黨員らとともにマレー人政党<sup>4)</sup>のマレーシア統一プリブミ党 (Parti Pribumi Bersatu Malaysia, PPBM) を結成した。

マハティールが首相を務めた22年間を通じて、汎マレーシア・イスラム党 (Pan-Malaysia Islamic Party, PAS) および民主行動党 (Democratic Action Party, DAP) はマハティールの宿敵であり続けた。ただし、マレー人を主体としてイスラム教による統治を目指すPASと華人を主要支持基盤として社会民主主義を標榜するDAPとの間の路線の違いが大きく、野党間の共闘は実現しなかった。マハティールの後継者と目されていたアヌアル・イブラヒムがマハティールとの路線対立の顕在化により1998年にUMNOを除名され、公正党（後に人民公正党, PKR）

4) 政党名に「プリブミ」と同じく「原住民」を意味するがマレーシアでは一般的に使われない「プリブミ」が使われたことから、この政党はプリブミすなわちマレー人と先住諸族の政党なのか、それとも「マレーシアの原住民」という意味を込めて華人やインド人を含めた政党なのか人々の関心を集めたが、創立者のマハティールは2021年回顧録でPPBMを「マレー人の政党」として作ったと説明している [Mahathir 2021: 44]。

を結成すると、PKRが橋渡し役をつとめることでPKR、PAS、DAPの三党による政党連合が実現した。路線の違いのためにPASが脱退したが、元PAS党員が結成した新党AMANAHとともに、PKR、DAP、AMANAHによって2015年9月に希望連盟(Pakatan Harapan)が結成された。

PPBMは2017年3月に希望連盟に加わった。PAS(を継承したAMANAH)、DAP、PKRとマハティールが手を結んだことが人々を驚かせ、さらに2018年5月の総選挙で希望連盟が勝利して92歳のマハティールが第7代首相に就任すると世界を驚かせた。

しかしマハティールは連立与党内の路線対立および旧与党連合の国民戦線による国会議員の引き抜き工作などによって国会の過半数の支持を失い、2020年2月に首相を辞任した。新型コロナウイルス感染症流行拡大を理由に国会の開催も解散・総選挙も行われず、国王が国会議員の意向調査を踏まえてPPBMのムヒッディン・ヤシンを第8代首相に任命した。ムヒッディンはPPBMを希望連盟から離脱させ、UMNOやPASと組むことで国会の過半数の支持を得た。党内で発言力を失ったマハティールはPPBMを離党し、離党者らとともに2020年8月に新党の祖国闘士党(Parti Pejuang Tanah Air)を結成した。

与党連合内のPPBMとUMNOの勢力争いの結果、国会の過半数の支持を失ったムヒッディン首相は2021年8月に辞任し、UMNOのイスマイル・サブリー・ヤコブが第9代首相に就任した。2018年5月に建国以来はじめての政権交代を経験したマレーシアは、その後一度も総選挙を行わないまま連立の組み換えによって二度の首相交代を経験し、与野党の構成政党だけ見るならば2018年の政権交代以前の状況にほぼ戻ったかのように見える。マハティールは与党連合からも野党連合からも距離を置き、次の一手を練っているかのようである。このタイミングで刊行された2021年回顧録には2021年9月までの出来事が記されている。

## マハティール回顧録『希望を勝ち取る』の主張

2021年回顧録は13の章から成る。第1章から第6章までは、マハティールが2003年に首相を辞任してからのマレーシアの政治動静およびマハティールの

動きと考えが記され、2018年5月の総選挙で勝利して15年ぶりに首相に返り咲き、2020年2月に首相を辞任するまでが記されている。それ以降の章では、多民族社会の統合(第7章)、イスラム教(第8章)、教育と倫理(第9章)、民主主義(第10章)の4つのテーマについて、マレーシア社会が抱える課題の分析とそれに対する処方箋が記されている。第11章以降は再びマレーシアの政治動静となり、2020年2月の首相辞任の背景およびその後の展開が記されている。華人の同化は主に第7章と第9章の2つの章で論じられている<sup>5)</sup>。

第7章「新しいマレー・ジレンマ」は、まずマレー人に目を向ける。マレー人は自分たちの土地が華人に乗っ取られてしまうという恐れを抱いており、その恐れに合理的な根拠はないものの、恐れ自体は現実的であり実際の結果をもたらしようとした上で、マレー人政治家どうしの権力闘争がマレー人の民族としての結束を弱め、そのことがマレー人の他民族への恐れと民族差別を増長させていると警告する[Mahathir 2021: 146]。

その上で、マハティールはマレーシアで制度的な民族差別がとられていることには華人も原因があると論じる。マハティールによれば、華人は概して現地社会に同化しようとしないうし、そもそも華人が華語教育を受ける権利が連邦憲法で守られているマレーシアでは同化という言葉は減多に使われない。世界のどこであっても海外在住の華人コミュニティは自分たちの言語、文化、宗教、伝統を誇りに思っており、マレーシアでも例外でない。ただし、他の多くの国では華人はチャイナタウンなどと呼ばれる特定のエリアに集住しているのに対し、マレーシアでは都市や町のほとんどが植民地期に華人の入植地として始まり、都市や町が全国に広がるにつれてマレー人は農村部に後退させられていったため、華人の居住エリアは全国に広がっている。このようにまとめた上で、マハティールは、一般に都市部と農村部の間には経済格差が生じるが、マレーシアではそれが民族の違いと重なることで都市部住民と農村部住民の間の対抗意識がはるかに強くなると論じ、その例として1969年の5月13日事件を挙げる[Mahathir 2021:

5) 華人の同化については2012年回顧録でも触れられている。第45章「2020年のビジョン」および第58章「教育」を参照。

146-147]。

マハティールはまた、マレーシア国民を構成する各民族は互いの間の文化的な違いが大きいために同化を好まず、マレーシア在住のインドネシア人とムスリム・インド人を除けばマレーシアでは同化は少しも見られないと言ひ、その理由として言語別に分かれた教育制度を挙げる [Mahathir 2021: 149]。自身の経験をもとに、植民地時代に子どもたちはみな英語で教える小学校で学び、異なる民族どうしても英語で会話することで互いのことを知り、心地よい人間関係を育むことができたという。独立後には、公立小学校の授業言語が英語からマレー語に切り替えられていった一方で、華語とタミル語でそれぞれ教える公立小学校も残された。また、公立の中学・高校の授業言語はマレー語に統一されたが、華語で授業を行う私立の中学・高校も残っている。こうして民族ごとに言語別に分かれた学校に通って育った子どもたちは、大人になっても民族ごとに分かれたままで、仕事に就くようになってから考え方や価値観の違いのために互いに不快に感じると言う。これらのことをもとに、マハティールは、言語別に異なる学校に分かれていることがマレーシアの国民意識醸成に対する主要な障壁であると言う [Mahathir 2021: 149]。

教育と同化の問題は第9章「教育と倫理」でも繰り返される。教育大臣だった経験を持つマハティールは、倫理観や人格の形成における教育の重要性を強く認識しており、教育を通じることで街頭での犯罪を減らすとともに、汚職のような国家規模の犯罪を減らすことにもなると考えている [Mahathir 2021: 193]。

マハティールは、華人とインド人はそれぞれ数千年の歴史を持つ外来文明を担い、自文化の伝統や継承について強い意識があることから、マレー人や先住諸族の価値観との間でしばしば摩擦が生じると言う。しかも、中国やインドからの移住者は何世紀にもわたって祖国でさまざまな苦難を経験してきた人たちであり、今日と明日の生き残りのために絶え間ない準備を続けるという価値観を育ててきた<sup>6)</sup>。これ

6) マハティールは医学的知識を交えてマレー人への優遇政策の必要を説いた『マレー・ジレンマ』で、中国では4000年以上にわたって洪水や飢饉が繰り返され、統治者がしばしば入れ替わってきたため、中国人は適者生存によって強い民族になり、東南アジアに移住した華人もそれを受け継いでいると論じて

に対し、マレー人はもともと農民や漁師で、自給自足の「その日暮らし」<sup>7)</sup>で十分だったため、余剰分を交易や貯蓄にまわすという価値観が育たなかったという [Mahathir 2021: 194-195]。

憲法第152条では、国語をマレー語と定める一方で、国内の他のコミュニティの言語を使用・学習する権利も保障しており、これに基づいて華語とタミル語でそれぞれ教える小学校が認められている。マハティールは、近隣諸国ではいずれも1つの言語で教える国立学校のみが認められているのに対し、マレーシアでは複数の言語で教える学校が認められていることがマレーシア国民としてのアイデンティティと価値体系の構築への道を阻んでいるとし、その原因の1つとして、マレーシアの華人コミュニティには、華語学校理事会連合会のように、いかなる代償を払ってでも華語学校を守るという強硬な立場をとる人たちがいることを挙げる [Mahathir 2021: 194-196]。

## 同化をめぐるマハティールの議論の検討① ——なぜ同化が求められるのか

同化に関するマハティールの議論について2つの角度から検討したい。

1つ目は同化が求められる理由についてである。マハティールはアメリカ合衆国を例にとり、アメリカ英語を話し、アメリカ文化を受け入れ、必要であれば自分の出身国を敵国とみなして出身国と戦うほどにアメリカを自国として愛している人は人種の別なくアメリカ人と呼ばれると言ひ、マレーシア国民も、マレー人、華人、インド人などではなくマレーシア人というただ1つのアイデンティティを持つべきとする [Mahathir 2021: 194-198]。

ここには、世界を国境で区切って、人はみな民族的な出身国に愛着と忠誠心を抱くものであるという発想を前提として、国境を越えた移住者とその子孫は出身国への愛着と忠誠心を持ち続けるために居住国を裏切ることがあるという考え方がある。マレー

いる [Mahathir 1970: 38-39]。

7) 原語は「kais pagi makan pagi, kais petang makan petang」。文字通りの意味は、「朝に引っ掻いて得たものを朝に食べ、夕に引っ掻いて得たものを夕に食べる」。これが「食べ物を手の指で口に運んで食事する」と解釈され、箸で食事する華人とマレー人が文化的に違うことの根拠とされることがある。

シアに照らして言えば、華人はマレーシアで生まれ育っても中国に愛着と忠誠心を持ち続けるためにマレーシアを裏切るかもしれないということになる。

この恐れの根拠として、マハティールはマラヤ共産党による武装闘争の経験を挙げている。マラヤ共産党は1930年に組織され、第二次世界大戦中の日本軍政期には華人系住民の支援を受けて抗日ゲリラ活動を展開した。戦後、マラヤ共産党は対日協力者に対する報復を行い、華人が多かったマラヤ共産党支持者と対日協力者が多かったマレー人との間で双方に死者が出る衝突が起こった。また、マラヤ共産党が植民地政府に対する武装闘争を継続したことで、軍や警察のマレー人に共産主義ゲリラの襲撃による犠牲者が出た。マラヤ共産党が武装闘争を行ったのはマラヤの解放のためだったが、非黨員である多くのマレー人の目には、中国共産党の指示を受けたマラヤ共産党に煽動された華人がマレー人を襲撃したと映った。マラヤ共産党は1957年8月のマラヤ連邦独立後も武装闘争を継続し、イギリスから統治を引き継いだマラヤ（後にマレーシア）政府と敵対した。マラヤ共産党は1989年12月にマレーシア政府と和平合意を結んだが、今日に至るまでマレーシアの公式な立場では国家の転覆を試みたテロリストとして扱われている。実際にはマラヤ共産党を支持しない華人も少なくなかったが、マレー人から見れば、華人は出身国である中国の指示を受けて居住国の政府に武装闘争を挑む危険な存在であると印象付けられた。

これに加えて、華人が居住国ではなく中国を向いている例として、マハティールはマレーシアの華人コミュニティが華語による教育を維持していることを挙げている。マラヤの華人のほとんどは中国南部の出身者の子孫であり、華人コミュニティでは主に福建語、客家語、潮州語、広東語が話されていた。しかし、中国大陸と台湾の学校が北京官話を授業言語に採用したことを受けて、マラヤの華人コミュニティの学校もそれに倣って北京官話（華語）を授業言語にした。マハティールはこれをマラヤ／マレーシアの華人に中国に倣う考え方があることの証左とし、中国に倣おうとする華人は現在も多く存在すると言う。その上で、民族の伝統や文化の発展のために中国に倣うことは理解できるが、国家の発展や社会統合の観点からは華人も居住国であるマレーシアに向く

べきではないかと訴える [Mahathir 2021: 149]。

マレーシア華人の中国に対する意識についてのマハティールの主張の妥当性はここでは検討しない<sup>8)</sup>。ここで検討したいのは、出身国への愛着や忠誠心のために居留国を裏切るかもしれないという考え方のもとに、居留国を裏切らない保証を求めるという意味で、出身国で身につけたものを捨てて現地のものを身につけさせるという考え方が移住者の同化を求める考え方に通じているということである。

これは、同化の度合いによって国家<sup>9)</sup>への愛着や忠誠心をはかるという考え方に通じ、さらに、体制に批判的な立場をとる者に対しては権利を制限してもかまわないという考え方にも通じるという問題がある。居住国を裏切らないことが重要であるならば、求めるべきことは文化的に同化を求めるのではなく、移住者やその子孫が居住国での居住で抱く不都合を解消することであり、その手当てがなされる限り、外来者やその子孫が居住国の多数派住民と文化的に同化しているかどうかはもはや重要ではなくなる。

このように、同化を考えるとときに権利の問題と切り離すことはできない。(1)居住国で利用可能な資源を公平に分けてもらえること、(2)公平でないとしたら、分ける協議の場に代表を派遣して参加できること、(3)それができなくても、分ける方法の決め方に対等な立場で参加できることが大切である。マレーシア華人に照らして言えば、ブミプトラ（マレー人と先住諸族）が優先されることが公式に認められているため、1つ目の居住国で利用可能な資源を公平に分けてもらえるかについては成り立っていない。2つ目の分ける協議の場に代表を派遣して参加できるかどうかについては、国民戦線政権時代はマレーシアの各民族・地域の代表を政府に入れる慣例が守られていたが、2018年の政権交代によってその慣例がなくなり、とりわけ2020年2月の政権交代以降は政府に華人とインド人の代表がほほいらない状況が続いており、すべての民族・地域を意思決定の場に参加させるという国民的な合意は失われているために成り立ってい

8) マハティールの主張に対する批判として、例えば星洲日報編集部からの反論記事「トウン・マハティール、あなたは間違っています——前首相への手紙」[星洲日報 2021年12月13日]を参照。

9) ここでの議論の対象は国家以外の集団にも成り立つが、煩雑さを防ぐために国家に限定して議論する。

ない。ただし、選挙権と被選挙権は民族の別なく与えられており、3つ目の分ける方法の決め方に対等な立場で参加することは成り立っていると言える。

同化の問題は権利の問題と結びついており、権利の問題についての議論を抜きに同化だけを議論することは、それが学術的な関心に基づくものであるとしても、結果として少数者の権利の抑圧に加担しかねないという認識が必要だろう。

## 同化をめぐるマハティールの議論の検討② ——「オリジナルな文化」と同化

2つ目は、同化についてのマハティールの議論が民族ごとにオリジナルな文化があるという発想に基づいていることである。地元社会の多数派民族にはオリジナルな文化があり、外国からの移住者には出身国のオリジナルな文化があるという前提のもと、移住者が出身国の文化を捨てて地元社会の文化を受け入れる過程として同化が理解される。

2021年回顧録の刊行に関する報道では、華人が現地社会に同化しないことを示す例として、マハティールは華人が箸を使って食事することを挙げたと報じられた[Star 2021.12.15]。マレー人は手の指を使って食べものを口に運んで食事するのに対して、華人は箸を使って食事するため、華人は現地社会に文化的に同化していないという主張である。これに対して、マハティールがフォークとスプーンを使って食事している過去の写真を掲載することを含め、さまざまな批判が表明された。

その1つは、マハティールはマレーシアの全ての民族を含む「マレーシア人」とその中の多数派民族である「マレー人」を混同しているというものである。「マレー人」は連邦憲法で言語や宗教によって定義されているが、「マレーシア人」は言語や宗教によって定義されておらず、マレーシアに居住するさまざまな文化背景を持った人たちの集まりであり、「マレーシア人」の食事スタイルが一様に決まっているわけではないという批判である。

また、仮にマレーシアの多数派であるマレー人に対する同化と捉えたとしても、すべてのマレー人が右手だけを使って食事しているわけではなく、マレー人の民族としての食事のスタイルを決めることはできないという批判も出された。マハティール自

身も、2012年回顧録で、マレー人は食事のときに右手を使って食べるが、マハティールは8歳のときに右手中指に怪我をしたことをきっかけにスプーンとフォークを使って食べるようになったと書いている[Mahathir 2012: chap. 2]。

また、マレー語にはいろいろな言語からの借用語が含まれており、中国語(北京官話および中国語方言)からの借用語も多いことから、マレー人の民族的な文化があるとしても、それはオリジナルなものではなく、常に他の文化の影響を受けて変化しているものと考えべきである。したがって、現地社会の多数派であるマレー人がオリジナルな文化を持っており、他方で国外からの移住者である華人が出身国である中国のオリジナルな文化を持っており、華人が中国の文化を捨ててマレー人の文化を受け入れるという図式で文化的な同化を捉えることは、現実に即していると言えない。

この点を踏まえてマレーシアの華人の現地社会への同化を図式化するならば次のようになる。少数派で外来者である華人が多数派であるマレー人の文化を受け入れていくとともに、華人が外来の文化を多数派に紹介して、それを多数派が取り入れていくことで、多数派と少数派の文化がそれぞれ変容しながら共通のものを増やしていく過程である。その過程で、少数派が出身国の文化をどの程度維持したままであるか、そして少数派が現地社会の一員としての待遇をどの程度得られるかは、事例ごとに異なる。少数派と多数派が文化的に同じである側面が強調されれば「同化」と呼ばれ、文化的に異なっている側面が強調されれば「統合」と呼ばれるが、文化的な同一性／相違性を客観的にはかることは難しく、その意味で同化と統合を明確に分けて捉えることはできない。

## マレーシア華人の同化と統合の捉え方 ——プラナカンから考える可能性

それでは、マレーシア華人における同化と統合をどのように捉えればよいのか。以下ではプラナカンの事例をもとに考えてみたい。

プラナカン(peranakan)とはマレー語で「子」を意味するアナック(anak)から派生した言葉で、「現地生まれ」と「混血」という2つの意味を兼ね備え、文脈によって2つの意味のどちらかが強調される使わ

れ方をする。

古くは交易などのために東南アジアを訪れた人々が現地で築いた家庭の子孫をプラナカンと呼んだ。多くの場合、プラナカンは外部世界から訪れた男性と現地の女性の間の子やその子孫であり、父方の関係で外国とつながりを持ち、母方の関係で地元社会とつながりを持ち、これにより、プラナカンはよそ者と地元民の両方の要素を持った。

プラナカンは、一方の祖先の出身地により、中国系(華人系)のプラナカン、インド系のプラナカン、西洋人系のプラナカンなどと呼ばれ、プラナカン自体が特定の民族集団を指すわけではない。ただし、人数が多くて社会的な影響が大きいという意味ではプラナカンの中で中国系プラナカンが突出しており、とりわけベナン、シンガポール、ジャワなどの地域では、プラナカンといえどもっぱら中国系プラナカンを指すと理解される。

独立後のマレーシアやシンガポールでは、国民はマレー人、華人、インド人の3つの民族に分類され、かつてプラナカンとされた人たちの子孫はそのいずれかの民族に分類されるため、現在ではプラナカンと分類されたり、自他ともにプラナカンであると認めたりする人は極めて少ない。その一方で、プラナカンは観光資源として知られており、中国系プラナカンの料理、菓子、刺繍、建築や家具が脚光を浴びている。また、インドネシアでは、プラナカンという言葉は中国系に限らず外来者と現地人の混血の子孫を指す言葉であるが、現在ではもっぱら中国系のプラナカンを指し、プラナカンについて言及されるときには「トトツ」(純血)に対比して混血という意味が強調されることが多い<sup>10)</sup>。

本稿では、マラヤ/マレーシアにおける統合と同化について考えるため、中国系プラナカンに限定せずに議論する。改めて図式化すると、プラナカンは外部から訪れた越境者と現地社会の住民の間の子孫であり、現地社会の文化を受け入れながらも外来の文化も維持しており、現地社会の多数派に対して少

数派である。一般的に、ある社会に多数派およびそれと文化的に異なる少数派がいるとき、少数派は多数派とどのような関係を結ぶのかについて、少数派が多数派の文化を受け入れて多数派に溶け込む場合と、少数派と多数派の違いを強調して互いに別々の存在となる場合が考えられる。これに対し、少数派が多数派と自分たちを合わせた全体を包摂するアイデンティティを提唱する場合も考えられる。

このことについて、19世紀半ばのベナンやシンガポールでジャウイ・プラナカンと呼ばれるようになったインド系プラナカンについて見てみたい。かつて中東アラブ地域では東南アジアを「ジャワ」と呼び、東南アジアから中東アラブ地域を訪れた人々を「ジャウイ」と呼んでいた。中東アラブ地域からの帰国者などによってこの呼び方が東南アジアにも知られるようになったが、東南アジアのイスラム教徒は自分たちをマレー人などの名前で呼んでいたため、「ジャウイ」は非マレー人の外来ムスリム、特にインド系ムスリムを指す言葉として使われた。

19世紀のベナンにはインド系ムスリムのコミュニティがあった。母方の家系を通じてマレー語を身につけて現地のマレー人社会の一員として暮らす一方で、父方の家系を通じてインドとつながりがあり、英語も話せるため、商業に従事したり通訳や教師になったりして、農村や漁民のマレー人に比べて社会的地位が高かった。マレー人たちは、インド系ムスリムは同じムスリムでも自分たちマレー人とは違うと考え、「外来のムスリム」という意味で「ジャウイ」と呼んだ。

これに対し、ジャウイと呼ばれた人たちの中から自分たちを「ジャウイ・プラナカン」すなわち「プラナカンのジャウイ」と呼ぶ人たちが現れた。「プラナカン」には「現地生まれ」と「混血」の2つの意味があることから「現地生まれ」を採り、「ジャウイ」はもともと「東南アジアのムスリム」という意味があることから、「ジャウイ・プラナカン」とは「東南アジアにいる現地生まれのムスリム」と解釈できる。インド系ムスリムもマレー人も東南アジアでは同じ現地生まれのムスリム、つまりジャウイ・プラナカンであるということになる。多数派のマレー人から自分たちとは違うという意味で「ジャウイ」と呼ばれたことに対し、多数派と切り離して自分たちだけでまとまるのでは

10) インドネシアのプラナカンおよびトトツについては[貞好 2016: 18-21]を参照。華人系プラナカンについて考えるためには現地社会におけるナショナリズムと華人について考える必要がある。インドネシア・ナショナリズムと華人については[貞好 2016: 序]を参照。マレーシアにおけるナショナリズムと華人については[山本 2006: 第一部]および[篠崎 2017: 序章]を参照。

なく、多数派のマレー人も少数派のインド系ムスリムも含めて、自分たちはみな「ジャウイ・プラナカン」であると唱えたのである。

このことを象徴するかのよう、ジャウイ・プラナカンたちは『ジャウイ・プラナカン』という新聞を創刊した。当時、マラヤとシンガポールには新聞がすでにあったが、マレー語の新聞はなかった。マレー語の新聞は、東南アジアのオランダ領地域では刊行されていたがイギリス領地域にはなく、イギリス領地域のマラヤやシンガポールでは、英語の読み書きをしないマレー人にとって『ジャウイ・プラナカン』は初めてもたらされた新聞だった。

『ジャウイ・プラナカン』の主な記事は、商品の価格一覧、為替レート、天候だった。広告ではイラスト付きで外国の商品が紹介され、外部世界にある物や技術を紙面を通じて垣間見ることができた。

紙面で読者の人気が高かったのは投書欄だった。投書の多さを反映して投書欄が急激に拡大し、1通の投書には1件しか書かないように、そして投書内容はなるべく簡潔に書くように編集部がしばしば紙面を通じて読者に呼びかけたが、それでも掲載しきれないほどの投書が寄せられた。投書の内容はさまざまだが、ある地域でマレー語を教える夜間学校が閉鎖されたという記事に対して、別の地域に住む読者が同じ問題があるという投書を寄せることで、住む地域は違っても投書欄を通じて同じ問題を共有していることがわかり、また、政府の担当者がそれを見て対策をはかるということも見られた。

これを一歩引いて見てみるならば、ジャウイ・プラナカンが行ったことは、現地社会には存在していなかった新聞という仕組を外の世界から持ち込むことで、現地社会が抱えている問題を共有して解決する手段を提供したということになる。しかも、そこで解決がはかられたのは少数派であるインド系ムスリムだけの問題ではなく、多数派のマレー人を含むジャウイ・プラナカンすなわち現地生まれムスリム全体の問題解決や地位向上のために新聞が用いられた。

『ジャウイ・プラナカン』以降、マレー語新聞が多く刊行されるようになり、新聞を通じて社会の問題を共有して解決するという方法が広く受け入れられていった。その後、政党やSNSなどのように同じ働きをする仕組も登場しているものの、現在に至るまで

マレーシアでは新聞が社会の問題を共有して解決する仕組という役割を担っている。

プラナカンは、一方の家系で外の世界とつながり、現地社会にない物や技術や考え方に触れやすい立場にある。また、もう一方の家系で地元の社会とつながりがあり、多数派は日常的に意識していない問題に気づき、現地社会にない物や技術や考え方を取り入れた解決方法を提案しやすい立場にある。このように、現地化した外来者／混血者が介在することで社会全体のあり方が向上していくのがプラナカンの統合と同化であると言える。本稿では紹介する余裕がないが、マレーシアでは「プラナカン」という呼び方をしていないが同じ仕組の課題解決の試みをいくつも見るができる。プラナカンという観点から統合と同化を捉えることで、統合と同化についての議論がより深まることになるように思われる。

## 引用・参考文献

### 英語等

Jabatan Perangkaan Malaysia (2011) *Banci Penduduk dan Perumahan Malaysia: Taburan penduduk dan Ciri-Ciri Asas Demografi*. Jabatan Perangkaan Malaysia.

Mahathir bin Mohamad (1970) *The Malay Dilemma*. Times Books International.

——— (2012) *A Doctor in the House: The Memoirs of Tun Dr Mahathir Mohamad*. MPH Publishing.

——— (2021) *Capturing Hope: The Struggle Continues for a New Malaysia*. MPH Publishing.

### 日本語

貞好康志 (2016) 『華人のインドネシア現代史——はるかな国民統合への道』木犀社。

篠崎香織 (2017) 『プラナカンの誕生——海峡植民地ペナンの華人と政治参加』九州大学出版会。

山本博之 (2006) 『脱植民地化とナショナリズム——英領北ボルネオにおける民族形成』東京大学出版会。